

日本文化における「心」の概念メタファー

Conceptual Metaphors of *Kokoro*

松 井 真 人

Mahito Matsui

要旨：本稿は、コーパスや辞典から収集された日本語の「心」に関するメタファー表現に基づいて、日本文化に存在すると推測される概念メタファーについて考察した。その結果、日本文化において〈心〉の概念は、《心は物体》という存在のメタファーと、その下位メタファー群である《心は容器》《心は建物》《心は人》《心は大気》《心は水》《心は像が現れる平面》《心はスクリーン》によって概念化され、理解されていることが明らかになった。

キーワード：心、概念メタファー、メタファー表現、日本語、日本文化

1. 序論

心についての人間の関心は古い。古くは古代ギリシャの時代からアリストテレスら哲学者たちが心の問題について思索を巡らせてきた。そして近代になり、ウィルヘルム・ブントによって実験心理学研究室が創設されたことによって、経験科学としての心理学が確立された(梅本・大山1992)。その後1970年代後半になると、哲学、心理学、言語学、計算機科学、教育学、脳神経科学、人類学、動物行動学などを中心とした、「知」に関する学際的研究としての認知科学が確立した(辻2003)。

このように、心に関する思索は2000年以上の長い歴史があり、心の働きについての科学的な知見も深まってきているが、心に対する関心を持ち続けているのは哲学者、心理学者、認知科学者のような研究者だけではない。それぞれの文化において、一般の人々も心とはどのようなものであるかということについての知識を持っており、それを次の世代へと伝えている。本稿の目的は、日本文化における〈心〉の概念を、認知言語学的なメタファー論の枠組みを用いて考察することである¹。すなわち、日本語における心に関わるメタファー表現を分析することによって心に関する概念メタファーを抽出し、捉えどころのない心という対象を日本語話者がどのように理解しているかを明らかにすることである。

2. 認知言語学におけるメタファー論

本稿で心のメタファーを分析する際に用いる理論的な枠組みは、Lakoff and Johnson (1980) やLakoff (1993) などで提唱されている認知言語学的メタファー論である。類似性に基づく比喩としてのメタファーの研究は古代ギリシャ時代から長く続いているが、認知言語学的なメタファー論が提唱されるまでは、メタファーは文学や弁論で使用される装飾的な表現技法

¹ 本稿では、日本文化における概念は〈 〉で示す。

であるという認識が主流であった(佐藤1992)。つまりメタファーは言語だけに関わると考えられていたのである。しかし、Lakoff and Johnson (1980) のメタファー観はそれまでのものとは次のような点で大きく異なる。まずレイコフらは、メタファーは弁論術や文学だけに関わる特別な言語表現ではなく、日常言語の中に広く浸透しており、メタファーなしには物事を語る事がほとんど不可能であることを指摘した。さらに、メタファーは言語だけに関わるのではなく、人の概念体系の多くの部分がメタファーによって成り立っていると主張した。(1) の英文を見てみよう。

(1) Look *how far we've come*.

We're *at a crossroads*.

We'll just have to *go separate ways*.

We can't *turn back now*.

It's been a *long, bumpy road*.

This relationship is a *dead-end street*.

We're just *spinning our wheels*.

Our marriage is *on the rocks*.

Lakoff and Johnson (1980: 44-45)

これらの英文は日常的に用いられる表現であり、すべて恋愛について何かを語っている。しかし文中の斜体の部分の表現は、もともと旅の様々な側面を語るために使われる表現である。このような恋愛を旅に喩える日常的な表現が数多くあることから、レイコフらは、英語圏文化では〈恋愛〉の概念自体が〈旅〉の概念に基づいて(関連づけられて)理解されていると指摘した。ここで概念とは物事についての百科事典的な知識のことである。そして、このように、ある概念をそれと異なる別の概念に基づいて理解することこそがメタファーの本質であると主張した。さらにレイコフらは、〈恋愛〉に限らず人が心の中に持っている概念の多くが他の概念に基づいて理解されていることを多数のメタファー表現で示し、人の概念体系の多くの部分がメタファーによって成り立っていることを明確に示したのである。このような概念体系のレベルのメタファーは概念メタファー (conceptual metaphor) と呼ばれる²。

では、なぜある概念を他の概念に基づいて理解することができるかという、一方の概念を構成している諸要素が他方の概念を構成している諸要素に対応づけられるからである。このような概念間の対応づけは「写像」(mapping)と呼ばれており、理解される概念は「目標領域」(target domain)、目標領域を理解するために用いられる概念を「起点領域」(source domain)という。したがって、認知言語学では、メタファー(正確には、概念メタファー)は概念間の写像であると定義される(Lakoff 1987, 1993)。例えば LOVE IS A JOURNEY という概念メタファーは、Kövecses (2010) によると下記のような写像である。

Source: JOURNEY

the travelers

the vehicle

the journey

the distance covered

Target: LOVE

⇒ the lovers

⇒ the love relationship itself

⇒ events in the relationship

⇒ the progress made

² 英語圏文化に存在する概念メタファーは、LOVE IS A JOURNEYのように小型大文字で表記するのが慣習となっている。

the obstacles encountered ⇒ the difficulties experienced
 decisions about which way to go ⇒ choices about what to do
 the destination of the journey ⇒ the goal(s) of the relationship Kövecses (2010: 9)

そして概念メタファーから派生する (1) のような言語表現としてのメタファーは、メタファー表現 (metaphorical expression) と呼ばれる (Lakoff 1993)。メタファー表現は、物事理解の方策としての概念メタファーの反映だといえる。本稿でもこのような認知言語学的なメタファー論を、メタファーを分析する際の理論的枠組みとして採用する。そして、心に関する日本語のメタファー表現を分析することによって、日本文化にどのような心の概念メタファーが存在しているのか、つまり〈心〉という概念が日本語話者によってどのように理解されているのかを考察していく。このテーマに関する先行研究としては、日本語と中国語における心の概念化を比較した方 (2010)、日本語の歌詞に見られる心の概念化を考察した鷺見 (2010) がある。方は日本語と中国語の心に関するメタファー表現を比較して、いずれの言語文化にも、「心は容器である」「心は水平面である」「心はモノである」という3つの概念メタファーが存在することを指摘している。鷺見は日本語の歌詞を考察し、心が「存在物」(「身体とは別個の物体」「脆い物体」「燃える物体」)、「容器」(「収蔵庫」「家屋」)、物理的空間(「空」「大地」)として概念化されていることを指摘している。本稿は、日本語コーパスと辞典類を用いて数多くの日本語のメタファー表現を観察することによって、日本文化に存在している心の概念メタファーについて考察する。その際には、方や鷺見が指摘していない心の概念メタファーの存在も明らかにし、さらに、概念メタファー間の関係についても考察していく。

3. 「心」の概念メタファー

3.1. 《心は物体》

日本文化において中心的な心のメタファーは、抽象的で形のない心を形ある物体 (object) とみなす概念メタファーである。出来事、感情、思考のような抽象的な対象を、人にとって認識しやすい物体と見なして理解するメタファーは「存在のメタファー」(ontological metaphor) と呼ばれており、我々の抽象概念の認識にとって重要な役割を果たしている (Lakoff and Johnson 1980: Ch. 6)。日本文化に存在のメタファーの一種である《心は物体》という概念メタファーが実在していることは、(2) のようなメタファー表現から推測できる³。これらの表現では、「揺れる」「折れる」のような、通常は形のある具体的なものに対して用いられる言葉が「心」という言葉とともに用いられている。

- (2) a. 心が揺れる (A) b. 心が折れる (A) c. 冷たい心 (A) d. 心が重くなる (A)
 e. 大きな心 (A) f. 心を打たれる (C) g. 心を動かす (C) h. 心が沈む (C)

さて物体には、人の感覚器官 (五官) を通して知覚される様々な特徴、すなわち視覚的特徴、聴覚的特徴、嗅覚的特徴、触覚的特徴、味覚的特徴がある。それに伴って、《心は物体》には複数の下位的な概念メタファーが存在する。そしてその下位メタファーから派生するメ

³ 本稿におけるメタファー表現は、(i)『現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言』、(ii) 中村 (1993) 及び (iii) 『広辞苑 第六版』から採ったものである。各表現の後ろに、出典が (i) の場合は (A)、(ii) の場合は (B)、(iii) の場合は (C) と表記する。また、日本文化に存在する概念メタファーは《 》で示す。

タファー表現には、それぞれの感覚的特徴を表す表現が含まれており、我々がそれらの特徴から受ける印象になぞらえて、心の状態が理解され、表現されている。以下ではそれぞれの実例を見ていく。

3.2.《心は視覚的特徴を持つ物体》

まず《心は視覚的特徴を持つ物体》という下位メタファーが存在する。この概念メタファーから生ずるメタファー表現には、(3)に見られるように形に関する表現、汚れや乱れに関する表現、明るさに関する表現、大きさに関する表現がある。

- (3) a. まっすぐな心 (A) b. ねじ曲がった心 (A) c. ゆがんだ心 (A) d. きれいな心 (A)
 e. 汚れた心 (A) f. 心の乱れ (A) g. 明るい心 (A) h. 暗い心 (A) i. 大きな心 (A)
 j. 小さな心 (A) k. 広い心 (A) l. 心の狭さ (A) m. 心細い (A)

(3) のメタファー表現は、物体が持つ特定の形、汚れや乱れ、大きさといった視覚的特徴から我々が受ける印象に基づいて、種々の心の状態が理解され、表現されている。例えば「ゆがんだ心」という表現は、歪みという視覚的特徴から受けるネガティブな印象になぞらえて、正常でない心の状態が理解され、表現されている。

3.3.《心は聴覚的特徴を持つ物体》

《心は聴覚的特徴を持つ物体》という概念メタファーから生ずるメタファー表現には (4) のようなものがある。(4c) はかなり装飾的な表現と感じられるが、意味は十分に理解可能である。

- (4) a. 心が騒ぐ (A) b. 心が静まる (A) c. 心の底を叩くと悲しい音がする (B)

この概念メタファーは、物体が持つ騒がしさ、静けさ、またはそれが発する音といった聴覚的特徴に見立てて心の種々の状態を理解しようとするメタファーである。

3.4.《心は触覚的特徴を持つ物体》

次に《心は触覚的特徴を持つ物体》という概念メタファーから派生するメタファー表現を見ていく。(5) は温度、(6) は重さ、(7) は柔らかさ・硬さに関するメタファー表現である。

- (5) a. 温かい心 (A) b. 冷たい心 (A) c. 冷えた心 (A) d. 熱い心 (A) e. 心が水をかけたように冷たく冴え返る (B) f. 心が凍る (B)
 (6) a. 心が軽くなる (A) b. 心が重い (A) c. 心が軽い (A) d. 鉛のように重い鈍い心 (B)
 (7) a. 柔らかな心 (A) b. 柔軟な心 (A) c. 固まった心 (A) d. 心が硬直しがちになる (A)

これらのメタファー表現では、温度、重さ、硬さ・柔らかさなど、物体が有する触覚的特徴から我々が日常的に受けている印象、すなわち我々がそれぞれの特徴に対して与えている意味に基づいて心の状態が理解され、表現されている。例えば、我々は温かさから愛情を連想する。そのような連想に基づく温かみに対する意味づけの結果として、「愛情がこもった心」を意味する「暖かい心」というメタファー表現が生ずるのである。

- (11) a. 容器には底がある
 b. 容器には深さがある
 c. 容器には奥行きがある

我々が (10) や (11) のような容器のイメージ・スキーマの特徴を知っているからこそ、《心は容器》から (12) のようなメタファー表現が派生する。

- (12) a. 心の内側 (A) b. 心を見透かす (A) c. 心を見通したように (A) d. 心の奥 (A)
 e. 心の中 (A) f. 心の深層 (A) g. 心の底 (A) h. 心の奥底 (A) i. 心に注ぎ込まれる知識の光明 (A) j. 凍えた心に温かい息吹を注ぎ (A) k. 心が満たされる (A) l. 心中ひそかに喜ぶ (B) m. 内心やたらに腹を立てる (B) n. 心が悲しみで一杯 (B) o. 心の底を叩くと悲しい音がする (B) p. 心外でならない (B)

容器が持つ (10a) の特徴から「心の内側」「心中」「内心」「心外」という表現が可能になる。また、境界線の存在から「心を見透かす」「心を見通す」という表現が可能になる。そして (10b) の特徴から「心に注ぎ込まれる」「心に注ぐ」「心が悲しみで一杯」という表現が可能になる。さらに (11a-c) の特徴によって「心の底」「心の深層」「心の奥」「心の奥底」という表現が生ずる。

(13) のメタファー表現が示すように、《心は容器》のメタファーでは、種々の考えや感情が容器の中の内容物 (content) に見立てられる。すなわち、〈容器〉の概念に含まれる「内容物」という要素が、〈心〉の概念に含まれる感情や思考という要素に写像されている。

- (13) a. 心中ひそかに喜ぶ (B) b. 内心大いに腹を立てる (B) c. 心が悲しみで一杯 (B)
 d. 内心恥ずかしく思う (B) e. 心の内で好く (B) f. 内心悔しさが漲る (B) g. 心の煩悶 (B) h. 内心甚だしく興奮する (B) i. 心中大いに感服する (B) j. 心のなかまでゆったりと落ち着く (B) k. 内心大いに驚く (B) l. 心の中で孤独と憎悪がもつれ合う (B)

(10c) の特徴によって、《心は容器》は《心は物体》の下位メタファーとなり、これらのメタファーは上下関係を形成する。そして上位のメタファーである《心は物体》から下位のメタファーである《心は容器》へと写像が引き継がれる。そのような写像の継承 (inheritance) の結果、(12o) 「心の底を叩くと悲しい音がする」のような、物体の聴覚的特徴である「音」と容器の特徴である「底」の両方を利用したメタファー表現が可能となる。

3.8. 《心は建物》

次に《心は建物》という概念メタファーを考察する。明らかに建物も (10a-c) 及び (11a-c) の特徴を持っているので、建物は容器の一種と言える。したがって、《心は建物》は《心は容器》の下位メタファーと言える。《心は建物》によって可能になるメタファー表現には (14) のようなものがある。

- (14) a. 心の扉 (A) b. 心のドア (A) c. 心の柱 (A) d. 心の窓 (A) e. ストレスや自我の歪みが増大、やがては魔性となって心の中に住みつく (A) f. 心を開く (A) g. 心を閉ざす (A) h. 心に明かりがともされた (A) i. 心の入り口 (A) j. 心の壁 (A)

以上の表現から、扉、柱、窓、壁、住むといった〈建物〉の概念を構成する要素が、〈心〉の概念に写像されていることがわかる。

3.9.《心は人》

本節では、《心は人》という概念メタファーについて考察する。つまりこれは、心を擬人化するメタファーである。3.7.では《心は物体》の下位メタファーである《心は容器》を見た。人も容器と同じように(10a-c)及び(11a-c)の特徴が当てはまる。人の身体にも内側と外側があり、飲食物を取り入れ、排泄物を出す。そして、人、飲食物、排泄物ともに物体である。さらに、身体(特に胴体部分)にも底や深さや奥行きがあると言える。したがって、人は容器の一種であり、《心は人》は《心は容器》の下位メタファーとなる。しかし、《心は人》では、心は単なる感情や思考の容器というよりも、〈人〉が持つ「生殖」という特徴が写像されることにより、感情や思考を生み出す源として概念化されている。《心は人》から派生するメタファー表現には(15)のような表現がある⁵。

- (15) a. 心が痛む(A) b. 心の傷を癒やす(A) c. 心の病(A) d. 心の健康(A) e. 心の休息(A) f. 心の糧(A) g. 心の栄養(A) h. 心の成長(A) i. 心を育む(A) j. 心をかきむしる(A) k. 心の垢(A) l. 心から生まれた美しい言葉(A) m. 対立と抗争は、疑心暗鬼の心から生まれるものだ(A) n. 楽しみで心が躍る(B) o. 騒ぎ立った心(B)

これらの表現から、〈人〉という概念に含まれる痛み、傷、傷の癒やし、健康、休息、食べ物、栄養、成長、養育、動作、垢、生殖といった要素が、〈心〉の概念内の様々な要素(心理的不調、心理的発達、思考や感情の産出など)に写像され、理解されていることがわかる。

3.10.《心は大気》

本節では、《心は大気》という概念メタファーを考察する。このメタファーから(16)のようなメタファー表現が生ずる。

- (16) a. 心が晴れる(A) b. 晴れ晴れした心地(B) c. 心が曇る(A) d. 心を覆う厚い雲(A) e. 暗雲が晴れた心境(A) f. 自分の心を覆っていた霧が払われていく(A) g. 心の中はどしゃぶり(A) h. 心の天気は不安定で、梅雨空の心には静かな雨が降っている(A) i. 思春期の子どもの心の底では、大暴風雨が荒れ狂っている(A) j. 暖かい心(A) k. 寒い心(A)

これらのメタファー表現は、爽快さ、不安、悲しみ、淋しさといった心の様々な状態が、晴れ、曇り、暗雲、霧、どしゃぶり、雨、大暴風雨、暖かい、寒いというような大気中で生ずる気象現象に見立てられ、理解されることによって生じている。つまり、そのような気象現象が起こる場としての〈大気〉の概念に含まれる様々な要素(気象現象に関する知識)が、〈心〉の概念を構成する様々な要素(様々な心理状態)に写像されているのである。

⁵ これらのメタファー表現には、「傷を癒やす」「病」「健康」「成長」「生まれる」など人以外の生物に対しても用いられる表現を含むものもある。

3.11.《心は水》

次に、《心は水》という概念メタファーを見ていく。このメタファーによって可能となるメタファー表現には (17) のようなものがある。

- (17) a. あなたの心に浮かぶもの (A) b. 何かしこりのようなものが、深く重く心の底に沈んでいる (A) c. ローマの永遠性を信じる気持と末期感とはからみあい、両々あいまちながらローマ人の心の底に沈殿してゆく (A) d. 心が凍る (A) e. 心が喜びで波うつ (B) f. 心に羨望の小波が立つ (B) g. 心が風のない池か沼のようにどんよりと澱む (B) h. 心が波立ち騒いで落ち着かなくなる (B)

これらのメタファー表現は、〈水〉の概念を構成する諸要素（物体が浮かぶ、物体が沈む、凍る、澱む、波が立つなど）が、〈心〉の概念を構成する要素である種々の心理状態に写像されることで生じたものである。この概念メタファーでは、感情や思考は心の中で浮かんだり沈んだりする物体、波、澱みとして理解されている。

3.12.《心は像が現れる平面》《心はスクリーン》

最後に、《心は像が現れる平面》と《心はスクリーン》という概念メタファーを見ていく。《心は像が現れる平面》からは (18) のようなメタファー表現が派生している。

- (18) a. 牡丹見て深く心に写したり (A) b. 〈想〉は、事物の像を心の中に写し取り、それに名言をほどこすことである (A) c. 感覚や感情というものは、心に映った物の影なのである (A) d. 言葉で自分たちの感情、心に映ったことを表現したい (A) e. 理想の未来を心に描く (A)

この概念メタファーでは、感情や思考、物事の視覚的イメージが心に現れる像として捉えられている。

さらに、(19) のメタファー表現から分かるように、《心はスクリーン》という概念メタファーが存在する。スクリーンにも、「何かの像が現れる平面」という特徴があるので、《心はスクリーン》は《心は像が現れる平面》の下位メタファーである。

- (19) a. 人々の活気あふれる姿が、鮮やかに心のスクリーンに写しだされてくるようです (A)
b. お昼は何を食べたか聞いてみると、その人の心のスクリーンには一瞬にして、スープにサンドウィッチといったイメージがあらわれるのです (A)

この概念メタファーでは、心のスクリーンに投射されるのは物事の視覚的イメージである。

4. 結論

本稿では、コーパスや辞典類から収集された日本語の「心」に関するメタファー表現に基づいて、日本文化における心の概念メタファーについて考察した。その結果、日本文化には少なくとも次のような概念メタファーが存在することが明らかになった。

(20) 《心は物体》

- (21) a. 《心は視覚的特徴を持つ物体》 b. 《心は聴覚的特徴を持つ物体》 c. 《心は触覚的特

- 徴を持つ物体》 d. 《心は味覚的特徴を持つ物体》 e. 《心は嗅覚的特徴を持つ物体》
(22) a. 《心は容器》 b. 《心は建物》 c. 《心は人》
(23) a. 《心は大気》 b. 《心は水》 c. 《心は像が現れる平面》 d. 《心はスクリーン》

(20) は形のない心をモノ化する存在のメタファーであり、心のメタファーの中心となる概念メタファーである。(21) から (23) のメタファーもすべて、心を何らかの物理的な物体に見立てるメタファーなので、それらは (20) の下位メタファーと言える。その中で、(22a) の容器のイメージ・スキーマを利用した概念メタファーは、(22b) および (22c) の上位メタファーであると言える。なぜなら (22b) および (22c) は、容器と同じ特徴を持ち、容器の一種と見なすことができる建物や人に関する概念を起点領域とする概念メタファーだからである。(23a-c) には上下関係はないが、スクリーンは像が現れる平面の一種と言えるので、(23d) は (23c) の下位メタファーである。

以上の分析から分かることは、〈心〉という概念は、存在のメタファー ((20)) 及びその下位メタファー群 ((21) - (23)) によって概念化され、理解されているということである。〈心〉は、抽象的な概念をより具体的な対象に関する概念に対応させて理解するという概念メタファーの機能が典型的に発揮されている概念領域だといえる。本稿で考察した概念メタファーの中には、存在のメタファー、容器のメタファー、建物のメタファーなどすでに先行研究で指摘されているメタファーもあったが、本稿の研究によって《心は物体》という存在のメタファーには人の五官で感知できる種々の特徴を起点領域とする複数の下位メタファーがあること ((21a-d))、先行研究で明確に指摘されていなかった《心は人》《心は水》という概念メタファーも心の概念化にとって重要な役割を果たしていることが明らかになった。

最後に今後の研究課題について述べておきたい。本稿では、もっぱら「心」という言葉を含むメタファー表現を基にして心の概念メタファーを分析したが、日本語で人の心の働きを表現する際には、例えば「気が進まない」「頭に血が上る」のように、必ずしも「心」という言葉を用いない場合も多いので、今後は、「心」という言葉を含まないメタファー表現も考察対象として、人の心の働き全般、精神活動全般が日本文化においてどのような概念メタファーで理解されているかを明らかにする必要がある。さらに、人の心を理解するための概念メタファーが、異なる言語文化間でどの程度共通するのか、あるいは違っているのかについての比較文化的研究が必要である。また、本稿では心の概念メタファーの経験的基盤 (experiential basis) すなわち成立理由の検討を十分に行うことができなかったため、この点についても今後の研究課題としたい。

参考文献

- 方小贊 (2010). 「日本語と中国語における「心」の比較－意味拡張、概念メタファーの観点から－」『比較文化研究』93:197-207.
- Johnson, Mark (1987). *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Kövecses, Zoltán (1986). *Metaphor of anger, pride, and love: A lexical approach to the structure of concepts*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Kövecses, Zoltán (2010). *Metaphor: A practical introduction* (2nd ed.). Oxford and New York: Oxford University Press.
- Lakoff, George (1987). *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*.

Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, George (1993). The contemporary theory of metaphor. In Andrew Ortony (Ed.), *Metaphor and thought* (2nd ed.) (pp.202-251). Cambridge: Cambridge University Press.

Lakoff, George and Mark Johnson (1980). *Metaphors we live by*. Chicago and London: University of Chicago Press.

中村明 (編) (1993). 『感情表現辞典』 東京:東京堂出版.

佐藤信夫 (1992). 『レトリック感覚』 東京:講談社.

新村出 (編) (2008). 『広辞苑 第六版』 東京:岩波書店.

鷺見幸美 (2010). 「日本語の歌詞に見る「心」の概念化」松下千雅子・エドワード・ヘイグ・杉村泰 (編著) 『戯れのテクノロジー』 名古屋:名古屋大学大学院国際言語研究科, pp. 73-80.

谷口一美 (2003). 『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』 東京:研究社.

辻幸夫 (2003). 「第1章 認知言語学の輪郭」辻幸夫 (編) 『認知言語学への招待』 東京:大修館書店, pp.3-16.

梅本堯夫・大山正 (編著) (1992). 『心理学へ招待 こころの科学を知る』 東京:サイエンス社.

使用コーパス

国立国語研究所 『現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言』